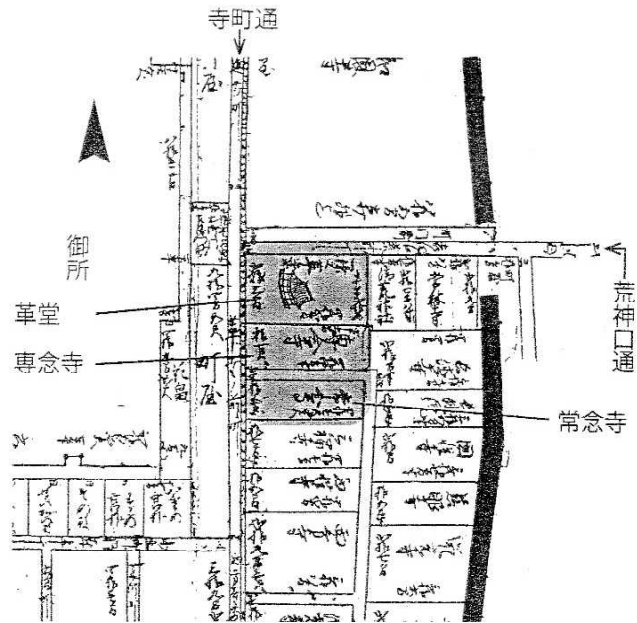


平成27年度調査

第2図 トレンチ配置図 (1/150)



第3図 洛中絵図 (寛永14年)

● 調査地 (推定)
■ 御土居

塔、一石五輪塔、墓石が出土しており、その数は破片を含め500点近くになります。一石五輪塔や墓石には戒名とともに年号が刻まれています。現在確認しているものの中で、最も古いものは天正18 (1590) 年、新しいものは元禄6 (1693) 年です。これは寺町の形成から宝永の大火で焼失するまでの時期と符合します。

4トレンチの西側にあたる7トレンチでは石列や溝、土坑、井戸などを確認しています。石列は東西方向に直線状に並んでおり、その周囲には円礫が敷かれています。これらは、4トレンチに広がる墓地へとつながる道や建物の区画に伴う遺構と考えられます。また、石列と石敷の間には溝が確認できました。溝の規模は、幅約1m、深さ約40cmで、排水溝として機能していたと思われます。その他に、17世紀の瓦や土器が大量に投棄された土坑も検出できました。これは、宝永の大火後の焼失物の片づけを行ったものと考えられます。

6トレンチ 旧校舎の基礎により多くの部分で遺構が残っていませんでしたが、部分的に土坑、柱穴、石組みなどを検出できました。この地点は荒神口通に面しており、洛中絵図による

と革堂に相当する場所と考えられますが直接関連が考えられる遺構は検出されていません。

3. まとめ

今回、4・7トレンチの調査では、寺町旧域に設けられた一寺院の敷地の大半を調査しました。昨年度調査した4トレンチ西側の2トレンチでは、寺院の建物があったと考えられる方形の区画施設や礎石が検出でき、その周囲には建物が火事にあつたことを示す焼土層が広がっていました。これらのことから寺町通に面する西側は寺院の本堂や生活空間として利用されていたと考えられます。今回の調査と合わせて東側の本堂の裏手には、墓地が広がる現在の京都市内の寺院と変わらない土地利用をしていたことがわかりました。また、絵図と照らし合わせると、浄土宗の寺院である常念寺または専念寺の可能性が高いことが指摘できます。

今回の調査は寺町形成期の寺院の土地利用や安土桃山時代から近世初頭の墓制の実態がわかる貴重な調査事例となりました。